

## 村石京子

ごっこからファンタジーへ——子どもの想像世界——

内田伸子著（新曜社）

著者はお茶の水女子大学教育学科の助教授であり、私どもの附属幼稚園にもよく見られる方である。先頃、研究のための実験の依頼があって、幼稚園の子どもたちが被験者となることがあった。実験を終えもどってきた子どもに「何をしたの？」と問うとお話つくりということで「金魚のトトのお話をきいて、自分で続きのお話をつくるの」と言ったり、「今聞いたお話をもう一回お話するの」と言ったりしていた。「むずかしいの？」と聞くと、「むずかしくない、面白いよ」「楽しかった、もう一回する」などという感想である。私は実験の内容については詳しくは知らなかったが、幼児が課題された事柄について一生懸命考えていく経験や、自分の頭の中で想像力を精一ぱい駆使したりすることは良い経験だと思っていた。そして出来ればその状況を知ったり、子どもの語る言葉の記録も見たいものと思っていた。それは日頃から子どもたちと接していて、子どもたちは素晴らしい想像世界をもっていると感じることがよくあったからである。

そして実験に加えて学問的理論づけと、研究の積み上げの結果、新しい書が誕生した。読んでみると、私の期待したとおり、子どもの生き生きとした言葉で語られた内容が多く

見られる。「お話づくり」をするときには、幼児でもすでに発端部から進めて、想像世界を生み出し、そして結末へともっていく形で物語を構成していくことが出来ることが、記述されている。

また、子どもの日常生活の中では、言葉情報の理解や記憶、想起の過程において受け手のもつ常識のメカニズムが働いていくので、送り手が伝えなかった意味が充分伝わらなかつたり、再生においては省力化されたりすることがよくある。受け手が自分にとっての中心的な情報だけを選択的にとりこんでいくことを「証言」や「噂話」などのわかりやすい事例から述べてあるのも面白い。

また「子どものお話をつくる」過程は、子どもが記憶の中の経験を素材とし、加工し、分解し、修正し、連想し、そして一定のまとまりある想像世界をつくっていく過程を、理論的に分析してある。幼児のつくり出す「ごっこ遊び」や「物語」において、いかに子どもが創造していくかをすじ道をたてて述べている。

子どもが想像の世界を言葉でくみ立てていく能力と原理というものを、子どもの生の言葉と合わせつつ、学問的に解明してあり、興味深く読むことが出来る書である。

子どもの心はこうして育つ

「豊かな感性をはぐくむ」研究会編（世界文化社）

現代は物の豊かさゆえに、かえって感じる心が貧しくなっているとさえいわれている。今、教育の中では「豊かな感性をもった子どもを育てる」ということが大きな課題とされている。

この本は、現場の先生方が子どもの心の問題を中心として、子どもの感じる心に目をむけ、その心を大切にして、豊かな感性をもった人間に育つことを願いながらまとめていかれた本である。

子どもの日常の中では、ともすると大人中心のものの考え方や見方によって、小さいけれど大切なことを見落してしまうことがありがちである。子どもの心を豊かに育てたいと思うなら、先ず第一に保育者が子どもの心に気づくことをしなければならぬ。子どもの気持をくみとり、子どものものぞんでいることを確実に理解し、子どもの心をしっかり受けとめていくことが根本なのである。

子どもの心の中に芽生えているものに気づかなかったり、摘みとってしまうような大人の言動があったり、押さえってしまうような保育がなされては、子どもの心が豊かに育つことは出来ないであろう。毎日の保育の中では、保育者は何よりも先ず、ひとりひとりの子どもを大切にし、子どもの今現在のぞんでいることを知って、その子どもの気持に合わせて保育をしていくことが大切である。こうした保育、大人とのふれあいがあってこそ、子どもは心豊かな人間に育っていくことが出来るであろう。

保育の場においては、認識や材料の新しさとか珍しさに目を向けるのではなく、自分の

身のまわりのものを自分の目でしっかりと見て、素直に受けとめていく姿勢をもつことが基本となる。日常の身のまわりの現象や自然とのふれあいなどにおいて、変化したり、育ったりすることに気づき、美しさに感動したり、新しい発見に心を打たれたり、喜んだり、あるいは悲しんだりする心をもつこと、これがみずみずしい豊かな感性といえるであろう。

この本を通して、純粋な子どもの心に気づくことの大切さを改めて思い起こすとともに、保育者の適切な言葉かけや、優しい思いやりなどによっても、子どもの心の中で育つものの大きいことを、事例や考察の中から読みとれたことであった。

言葉のしつけ——豊かな言語表現——

日本語シンポジウム（小学館）

最近「日本語が乱れている」とか「新しく言葉がつけられている」などとはよく耳にする言葉である。このことに関しては全く同感と思うことがある。この間ある大学の先生からうかがった話であるが、ある集りに先生に出席してもらいたいと言って頼みに来た学生がこう言ったそうである。「枯れ木も山のにぎわいですから、是非先生にも出席して下さい」と。先生はびっくりして返す言葉がなかったと語られた。また最近の「住めば都」という解釈は、若い人たちの間では「住むのなら都がいい」という解釈があるという。こん

な話を聞くと、ついでいくのが大へんという気持ちにさえなってしまう。身近でも若い母親が敬語の使い方を知らなかったりするのに驚いたり、子どもの言葉づかいの荒さを嘆いたりすることがよくあって、言葉のしつけのことに關しては日頃から関心が深い。

この本は朝日新聞社主催、小学館協賛の「日本語シンポジウム」を収録したものである。一部と二部から成り立っており、第一部は「言葉の道しるべ」として大岡信氏の講演が載せてある。言葉の発生、つまり子どもが言語を獲得する営みを根源的なところからみている。その中で子どもの育つ過程と、言葉を身につけていく過程が非常に深く一致しているところある。母と子の関係は、ラブとアタッチメントの関係で成り立っており、言語の習得もここから生まれてくるという。言葉について考えるとき、一番大切なのは人と人との関係であり、言葉の教育は胎児のときからその教育がはじまっているということなど、うなずけるところも多い。

第二部は「言葉のしつけ」という題での当日のシンポジウムの記録である。討論参加者は、青木雨彦、五代利矢子、柴田武、三浦朱門の四氏と西村秀俊氏の司会によって進められている。読みながら会の雰囲気や流れを感じつつ、言葉のしつけの出来ていない子どもや、言葉づかいを知らない若者の現状を嘆くのではなく、自分たち大人世代にもまたかえりみなければならぬことがあるのを思っ参考になることが多く、また面白く読むのであった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)